

地理と地形

奄美大島は、九州と沖縄の間に 200km にわたって広がる奄美群島に含まれる 8 島の有人島のうちの 1 島です。亜熱帯地域に属するこの島は、ネパール、サハラ砂漠、メキシコ北部とほぼ同緯度に位置しています。かつて、この島々は 1200 万年前から 200 万年前の間にユーラシア大陸から分離した大きな陸塊の一部でした。この陸塊はその後複数の島々に分かれていき、そのうち最も大きいものが沖縄本島、奄美大島、徳之島となりました。何千年もの間に、黒潮と呼ばれるフィリピンの東岸沖から北上する暖流がサンゴ礁の形成を促しました。

小さな地域内にみられる多様性

奄美大島は 5 つの市町村に分かれています。最も大きい都市は、人口 4 万人以上の奄美市です。島にある空港からは日本の主要都市への直行便が出ており、近隣の島々に渡るフェリーも頻繁に運行しています。712 平方キロメートルの面積のうち約 7 割が山地である奄美大島の海岸線からは、木々が密に茂る急勾配の斜面が立ち上がっています。標高 694 メートルの湯湾岳は奄美大島の最高峰です。対部分の耕作地は島の北側のより平らかな部分にあります。また、奄美大島には、日本で最も広い常緑広葉樹林と二番目に広いマングローブ林もあります。

集落の島

奄美大島では、島内の村を「集落（communities）」または「シマ」と呼ばれます。（シマとは日本語で island を指す語ですが、島民は各自の集落のことをシマと呼んでいます。）ほぼ全ての集落が海岸沿いの河口付近に位置しています。近代まで、集落間は内陸部を通る交通網で結ばれておらず、商売や移動にはもっぱら船が頼りでした。数々のトンネルが建設されたおかげで、今日ではすべての集落まで道路が通っています。